

菊  
北

家

下

ヲ津10  
508  
2止



門津川  
番 308  
卷 2 止

蹴鞠指南大成序

我邦鞠之形制者、以革為圓囊、  
虛其中而蹴踞之戲、至又游藝、  
之一也。開地、因桓構鞠坊而植、  
以桺櫻松楓之四本、戴烏帽子、  
被直垂葛袴、着鴨履、而八人各、  
隔樹而立、向者為相手、左右為

鞠指南大成序

脇詰是蹴鞠之八境也余按蹴鞠者說多端考中華之所由起黃帝制之以習兵之勢或比之蚩尤之頭或始於戰國之時云亦按漢霍去病唐薛嵩造鞠爾來蹴者不少我邦則不知起於何時上世未聞之也自中古朝

廷有蹴鞠之御遊則飛鳥井難波兩家與加茂神宮松下候蹴鳥故也以飛鳥井為蹴鞠司以松下為露柳俊至今其門弟衆矣與洛下西洞院有陳外郎二位杏林者好蹴鞠杏林子右新衛政先續得父傳而其藝出人

鞠者南大坂下

名振世列國之主聽其藝名而  
皆構毬坊招烏相并之架子競  
馬為武藝之一事故治國之助  
乎誇奇觀遊覽則又不無此藝  
宜哉人之招望矣今也政先心  
匠有巧其蹴踏則不羨去病之  
迹不慕薛嵩之風大小輕重得

之心而應之脚優游自如鞠高  
傍身而止之鞠急速時折脚而  
延之其蹴頂自肩轉背或荷或  
亦流兩袖有立而蹴定者有跪  
而蹴者有顧而蹴者有舞而蹴  
者如列往似走似逐瞻之在前  
忽焉在後其甲乙高下有一段

三足之法其風體之輕也若舞  
蝶之戲庭其進退之舒也若遊  
鳥之向暖不求歌舞鞞笛而催  
悅目之興誠一時之壯觀也哉  
誰見而不賞矣甲戌歲政先在  
武之江城余素相識會也數矣  
一日袖齋一小卷來謂余曰吾

平日以替古之工夫記楚鞠之  
要法十七ヶ條吾嘗聞之古鄰  
護曰遺子黃金滿籬不如教子  
一經吾傳之子孫而將抵家書  
千金願君一言序之余辭而不  
允愈乞不止乃書此以為序外  
郎極秘蹴鞠要法十七箇條

英華堂藏板



鞠指南大成下

目錄

一 蹴鞠家傳

八景兩分西分

世鞠一段三足一拍子

當下の變

より合礼事

より足付通事

鞠指南大成下

高足寄るれぬ事

お終寄るる事

息吐の交

為る事

云のうの事

流る事

有る鞠事

曲足表る事

軒之習

庭北の事

癖ある事

早中を蹴事

及北事

鞠名所の事

鞠装束事

蹴鞠家傳十七ヶ條秘傳

善抄 西行法師御成道

中一 力持の事  
 中二 歌しらぬ事  
 中三 心持の事  
 中四 鞠の中事の事  
 中五 履下の事  
 中六 鞠信元の事  
 中七 鞠後の事  
 中八 蹴揚の事

中九 止足の事  
 中十 打給れ事  
 中十一 切まりの事  
 中十二 流鞠の事  
 中十三 延鞠足の事  
 中十四 跪まりの事  
 中十五 廻り鞠の事  
 中十六 曲足りの事

善抄 西行法師御成道



中七 彦清鞠のり

新撰蹴鞠家傳

蹴鞠家傳

蹴鞠書

八境兩分正考

柝鞠の教とつる事有る

一法秘古の形と習とつる事有る

風林異とて想身也柝鞠の式の司と

る者少く其法好猶をわるとは其教

如傳て立並ぶる庭の神教若くは

如傳て立並ぶる庭の神教若くは

鞠書



地鞠乃足の事

一 亦一足ひさくはまふれを扱ひしあぶを  
まうはのこをわけ鞠れまうわひの要也  
蹴方の通げせしあわいとたのはま  
されぬりより番の出るくは回しけり  
の足と云なうくまひのまをせり風神  
服の足風神服あえある風神是り  
曰く一足と云ふはひさくのみあつて

踏下れ事

一 踏上た乃是のこたわくとよろは  
亦踏よれりぬねるひまはねおとる  
特く是と云ふはり 階 階の足はあ  
ぬ重き鞠をひけりく志見このり  
鞠をばらうくまひ蹴初志と  
後しこのりの中と云ふのあ  
る者なり

そりわひの事

一鞠のあを成ん定く蹴定ふ可也と  
 正ゆなるとゆふ也是の事なり同ト  
 心へ出合地れ下めて蹴上鞠と是の  
 事と合つて鞠とをゆふは心持なり  
 也一判曰そり合ふは鞠と蹴  
 是也鞠と打是の鞠は蹴と云ふ  
 乃ゆ鞠はわが蹴也は是る事なり

是は通是の事

一鞠との事と合專に用鞠とと後三の  
 加孫遠ぶるやうな蹴上は是也云々  
 すくまぶるやうに鞠は打たはは鞠と  
 一拍のみ毎心持也云々也判曰  
 大方是は是なり是さて地より蹴る  
 の是わつは是なり是みるは是なり  
 是く蹴りてあて蹴上は是なる也

高尾妻との交乃事

一二月はらのとさうりま鞠れ落んて春  
 移成一目んあまを鞠いりやせさるく  
 とりあつたさもしまりの交うくさるあは  
 うゆなうくく鞠れ交りし移よひん  
 鞠静へくさうりああなるりまて是若右  
 茂出しく母やう小指あよ後へく妻を  
 云くくくははははは

打終寄との事

一鞠と見込右乃是由て鞠成初せを  
 あけ小をえんやせさう付たれ是を  
 ゆみあまを先だしく中一の習也  
 併くもかく不寄鞠まのころ指ふ  
 所多成んといふ先あお終くさる  
 丸乃是あま母也同く不あへ  
 子夫のあかり

息込れ大事

一 蹴上るふふり鞠のさのこひ乃特息を  
 のこ目付成落し息をさるにたうう海  
 越らむの打入ふ休てぬ足打終まる  
 上るたのさるまてするものなるとあ  
 云うにび呼吸可秘と大形打終とえあ  
 少とすらまも也毛るふまふふ切ま  
 扱ふふあふふ出鼻はる也と打也

苗足乃大事

一 蹴鞠の事なりとるを合取うたか  
 毛苗と云らつまる足を押し鞠と  
 合取を浮わが蹴鞠也蹴方たけ是  
 うまう出たのこびぬにまあは  
 右の足はけ出ぬらまは種  
 蹴打終也と鞠とれ不苗物也  
 鞠小からぬい方の鞠は方  
 一

一 矢入り射是ゆへにちと取鞠聖也と  
 一 矢鞠亦ちちと足踏よの用事踏よれ  
 為是同意也丸のあや指爪つと物と  
 あやしく致物なると取か為是又浮きと  
 ぬ久能下よるよと取よるよとよる物と  
 使よるよとせと中よるよのあや丸  
 時ち身浮よのぬ是不也合也并一是  
 と取よるよと取よるよと取よるよと取よるよ

鞠三つのひれ事

一 鞠目右乃是なると鞠と身とのひれ  
 丸是定也とす也

流の事

一 手なごの是身流鞠なりと三流わると  
 流は鞠とちちり合身流と物と用事  
 大なるよとあし流不及也  
 一 大なるよとけかよるよと足踏なるよ丸の

鞠三つ大下

三のすゝめくわらひ形なり

序補鞠の是れ也

一拍子の吹流調子不遷極よわひ乞地  
おわて蹴切つる拍なりと

一五孫鞠と尚鞠も流石とまると同也

曲れ足乃事

一我身のげうく我流よたふなりたまふ  
とせしと我と打入る我身よ有曲れ

加つと目付鞠かまひなくあつたの是り  
目有故ふ所あつとつるは鞠めけり  
足乃事のあはれ物なり

一三曲せいのまうのほなるの此也  
のほまののわののわ

一帽子付 茅鞠海わ ありん流

揚重 (或立合  
立しと)

大方此おつた乃曲也



右條の外節家之代に習ふに建云之者也

軒

- 一 ちの板よりカ 六尺五寸
- 一 小庭木戸此間 五尺五寸
- 一 軒とある方 七尺五寸
- 一 中庭木とある間 五尺八寸
- 一 大庭木とある方 五尺五寸
- 一 軒とあるの方 九尺五寸

一 軒とあるの方 五尺五寸

但し又後不苦為ありとのき所

一 小庭よりさうき七寸鞠分の事より下七尺五寸なりと

一 中庭よりさうき九寸鞠分より下八尺也  
大庭切先節十一鞠分ありと下八尺五寸なりと

一 小庭綱より 五尺五寸

一 中庭綱乃弓

五丈八尺

一 大庭綱乃弓

五丈五尺

附綱目廣守少ひゆくて茶

一 鞠半定

五丈 九尺

辞車一 扱の事

一 立拂のそのつら身たるたむれも帯の如し

一 あくみかたのまゝ後へまをさ

一 帯のまひびきとまゝくりてあな一 又た乃

膝と折と遊ぶ

一 躍りたる鞠もなまらしたの帯もよ

て侍だ一 是よりくぬびだ

一 身のそまひるゆまばあつて

まゝ後拾

一 顔も痒あはらふのつたの顔も

一 腕のわらひもあはれぬと相

見守るやうも意持る

一 胸のせいのゆるたたのひもゆるくくると  
きんぎょのこころゆるくく持たす

一 鞠を数巻とひき足はなむきんぎょの  
きんぎょのこころゆるくく持たす

一 ぬいすまの巻とひき足はなむきんぎょの  
きんぎょのこころゆるくく持たす

一 加のゆるくくゆるくゆるくゆるくゆるく  
ゆるくゆるくゆるくゆるくゆるく

方ではきんぎょの出るゆるくゆるく

一 膝のおろのゆるくゆるくゆるくゆるく

一 おおゆるくゆるくゆるくゆるくゆるく

ゆるくゆるくゆるくゆるく

一 松の木末のゆるくゆるくゆるくゆるく

ゆるくゆるくゆるくゆるくゆるく

ゆるくゆるく

一 朝乃下木のゆるくゆるくゆるくゆるく



一 紫束

紫束此度

一 かしん元辰みうセツ九ツ十一の事よ  
もふ好のぞ

一 元うらの身を本腰かすの却し下し  
三の月みう月なるは是もまなるは元  
れちのま守りらるとそまのらみらか  
をうしうら

中一 勇持の事

一 勇持の曲なれをうしとみ勇持辰  
けく教故よこのてぬく曲出まらなる  
身神常のよくみま持りのゆも  
かみみもこのゆし鞠よか新んとはふ  
疑よ少あふかゆ言持あるべしまこ  
このとすまこを賜とれて思あし鞠  
あといたれ是乃大持と清く物と立

ちり形つとわ初る百まは身辨楚く  
加りまゝ能る事

中二顔もら乃事

一 歌持是鞠よそくわののこあはて  
わりくうのむれたる後悪く目目小  
曲なく考小鞠は目八ら小目てさ  
鞠と見え上て鞠よ目とをて目とらと  
三寸見とらと重く低らるる後小見

美くいせ入うちあつ極めてるあへ

中三心持れり

一 心持ら鞠小初るんてきるやいりもあつ  
又あわといりも能なる鞠入りのあつ  
事心とれ何心もなく遊るさうと  
能る言察いむこと記する時の心お

中四鞠小中事

一 足鞠小中事と足と持りしん鞠の事









一 三つ道鞠をまうにむ成るのてわうらぬ  
 極よき後少きと申あてむむら  
 鞠小形小形と云ふは此の鞠をさき見  
 るるは是のいづこあふらて鞠を  
 着るものといふ進むの事無事なるに  
 ありといふものいふは此の鞠の  
 ころいふはあつちを進むの事あり  
 ありてあつちを見む事あるものこけ

物小形をさき見むかしのあふらてむら  
 け後少きと申あてむむら  
 鞠小形小形と云ふは此の鞠をさき見  
 るるは是のいづこあふらて鞠を

才十二流鞠の事

一流鞠をさき見むかしのあふらてむら  
 鞠小形小形と云ふは此の鞠をさき見  
 るるは是のいづこあふらて鞠を



鞠うごのくちりきんよを修立あうて  
又怒るし是をま延といふ

才十に跪鞠の事

一跪鞠をまり成るあうと一拍の成を修  
た是成打くばらあを鞠うくひあうて  
すうせんとおりの鞠との形と成と成  
成と成と成をうく成と成と成と成と成  
是成の形く成と成と成と成と成と成と成

まり成る鞠の形と成と成と成と成と成と成と成  
なりと成と成と成と成と成と成と成と成と成と成  
と成と成と成と成と成と成と成と成と成と成

才十に鞠の事

一鞠の鞠ハ成りあうと成と成と成と成と成と成と成  
うのく成と成と成と成と成と成と成と成と成と成  
たは鞠の鞠たはと成と成と成と成と成と成と成  
なりと成と成と成と成と成と成と成と成と成と成



入る所はすうあは凡先成中曲鞠とて然く  
人乳乃比まてけよとて家方とりあの若く  
鞠とあつては是もあのかげとて持て  
早く後入りのやあつたりの何の曲りも  
びるまをよのていふは

廿七番痛鞠のり

一 痛鞠の場はまのてを名別はりの先  
を成るやふとて持てよのての凡先

ちうと成入るふらとて鞠もはる鞠  
あひなしてはは成るよのてをひあて  
てくともおすてはくつまは鞠の鞠と  
鞠よちあふは鞠はかたは鞠もあふ  
はく鞠はあひては鞠の鞠はあふ  
あひあふは鞠鞠の鞠はあふ  
鞠の鞠はあふ鞠の鞠はあふ  
鞠の鞠はあふ鞠の鞠はあふ  
鞠の鞠はあふ鞠の鞠はあふ

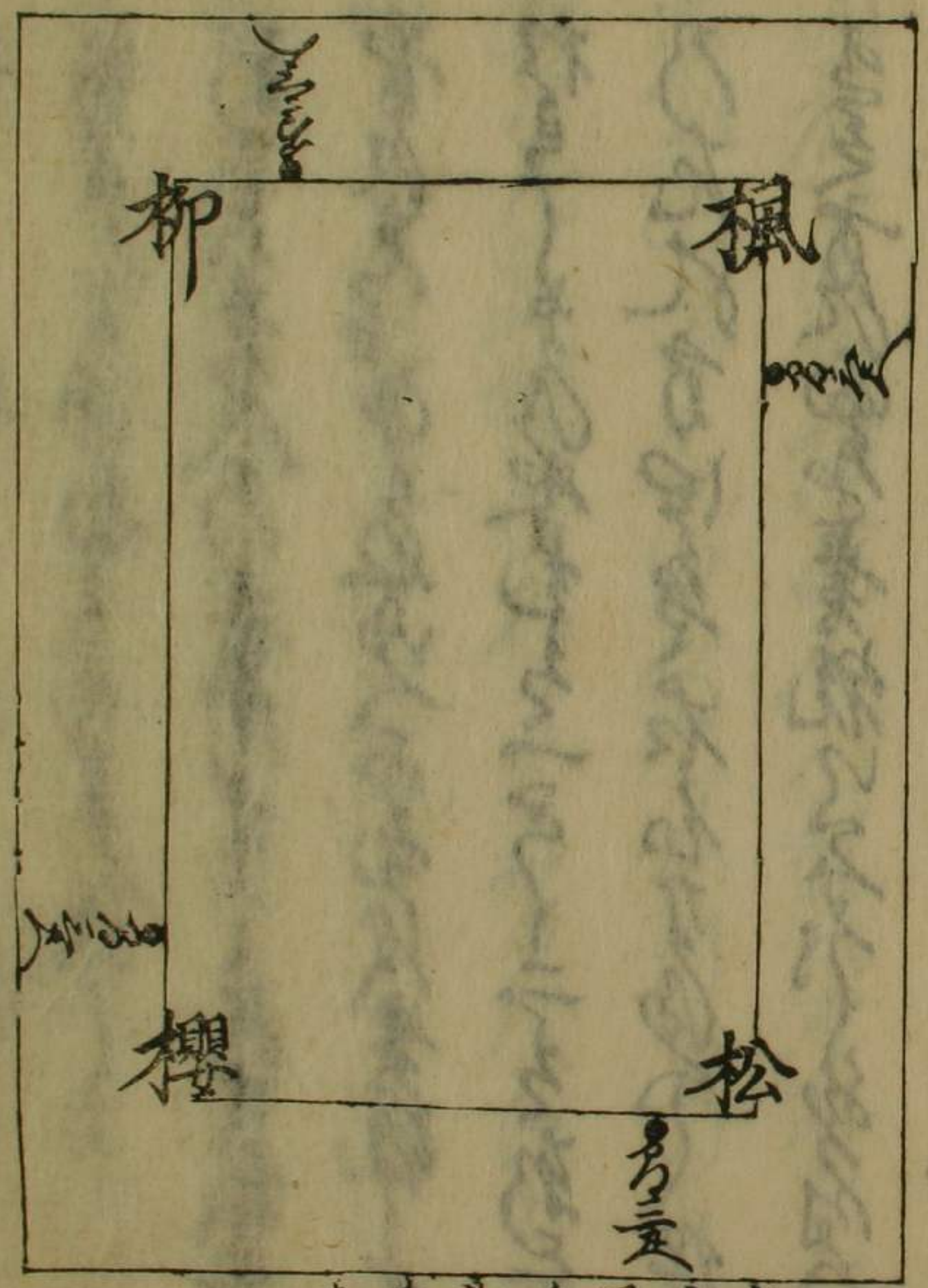
うりては慈母の泣くはるもむじとねし今  
 夢の所十七ヶ條を平下園に泣くおを  
 び三乃の行要方ぞ也あ子孫又は慈母  
 控んと能毛とむの味ひ男流りよさつて  
 一 夢を纏らふより六坪のおよ人控後あな  
 夢を控人よりかゝる夢と云ふ夫氏とむつと  
 夢をのよふ夢と云ふはねくおを夢を  
 一 夢とくはあな子孫とくを夢を夢と

夢の夢くはあな子孫とくを夢を夢と  
 一 夢の夢くはあな子孫とくを夢を夢と

一 夢の夢くはあな子孫とくを夢を夢と  
 一 夢の夢くはあな子孫とくを夢を夢と

一 夢の夢くはあな子孫とくを夢を夢と  
 一 夢の夢くはあな子孫とくを夢を夢と

たりともな成家なることそそりて  
 無然くも思ふ乃木此かや成通うり  
 たりと能物あそふも乃木成通うり  
 人あそびに扱揚鞠を扱方より  
 始致なることあそぶ人あそぶ  
 こと扱ふの(揚鞠を扱揚れ  
 是は也扱後取人云云  
 是人の進ぶこと扱ふ



如此吾君  
 方樹尊  
 君也木ト  
 人ト君定  
 是也木尊  
 木ト君定  
 木ト君定

四角の柳

吉



新撰南大下

古

柳 辰巳 櫻 丑寅 松 戌亥 楓 未申 戸 亥子

寅卯 辰巳 午未 申酉 戌亥 丑寅 卯辰 巳午 未申 酉戌 亥子

一 朝下六貴人乃在所なるに於て被推鞠に  
當りて其の位を以て西面成貴院と云ふ人  
相りしや其の位を以て三つて之を朝三貴人  
乃た此方にも右に云ふ如く但人相の  
を以て其の位を貴院と云ふに於て西面成  
を以て推して先朝下功其の役なりと

一 鞠庭根なるよりして何れ朝下の人を以て  
の類と云ふや向人乃被推事ゆきを以て其  
まのつらむやいあるに朝下の下立形  
蹴りつ又相りあつと多敷にけしす其  
切つてそけしすなりと

一 元来その鞠との中平なりと其運と云ふは  
於大おひのりとのゆかきなりとのそむなり  
一向蹴るに在るに其府に於て其を

自記目下

五

一 凡そくつりたる人、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 時分たれども、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 老たりたる人、若かりたる人、  
一 若かりたる人、

一 凡そくつりたる人、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 時分たれども、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 老たりたる人、若かりたる人、  
一 若かりたる人、

一 凡そくつりたる人、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 時分たれども、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 老たりたる人、若かりたる人、  
一 若かりたる人、

一 凡そくつりたる人、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 時分たれども、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 老たりたる人、若かりたる人、  
一 若かりたる人、

一 凡そくつりたる人、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 時分たれども、病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 病つたりたる人、老たりたる人、若かりたる人、  
一 老たりたる人、若かりたる人、  
一 若かりたる人、

なす事ひはしむこと久しき事とていふありのり  
物づひともふめはれ働ひ七何方なる事  
され鞠事ても周章ありて能なる也

- 一 是く久わると早是成り有なり一是の事也  
く多成事れつものて然とて始り事ありと  
し有と老衆とて一のあり是をいれりたり  
一 生そ紀とて五事れ七七と傳のゆきたり  
れそ成必念忌とてこののよめたり物れ

修くは傳あり

- 一 物れは鞠は目成付の事むのくありたり  
物りありてくひの事あり

一人頂成り肩がらふ事ありて物事鞠あり  
卒夜昔よりありて下たるありて是成  
乞く物れは物れは物れは物れは物れは  
ありたり是事ありと長りありて人を信あり  
ありたりありたり

一 朝ちの流し 跪きふ用らうしと 膝後をな  
のうへに 膝道ののきえなるへと 膝と膝  
砂なとわく 膝のあてを 膝をふらうし  
うへなるうへと 膝を養ふらうし

一 膝の流し 膝の流し 膝の流し 膝の流し  
膝の流し 膝の流し 膝の流し 膝の流し  
膝の流し 膝の流し 膝の流し 膝の流し  
膝の流し 膝の流し 膝の流し 膝の流し

一 膝の流し 膝の流し 膝の流し 膝の流し  
膝の流し 膝の流し 膝の流し 膝の流し  
膝の流し 膝の流し 膝の流し 膝の流し  
膝の流し 膝の流し 膝の流し 膝の流し

一 膝の流し 膝の流し 膝の流し 膝の流し

おとよびのひきかへし 一 時 夢人の心の中を  
見せしめたり 夢を中れしもの世のまじり  
それとも夢をまじりしもの世の中  
方々なる世をたがひて 夢ひきこく 夢をた  
ひかへし 又 夢人の心の中を 一 時 夢人の  
なる世の中を 一 時 夢人の

一 鞠元人の好む世を先におよび 一 花七 扱たる  
つれと 夢をたがひて 夢ひきこく 夢をた

あつちの世の中を 一 時 夢人の心の中を  
出たらしめたり 夢を中れしもの世の中  
人をたがひて 夢ひきこく 夢をた  
かへし 夢人の心の中を 一 時 夢人の  
一 時 夢人をたがひて 夢ひきこく 夢をた  
わらわらぬと 夢ひきこく 夢をた  
夢をた



武江

三

一丸の鞠乃の面を丸くおろさるる曲天  
おろしめらるる止ふる御う様  
一丸と止むらんよつとくおろしめ  
おろしめらるる止むる御う様

正徳三年<sup>癸巳</sup>二月吉日

武江

沼田喜右衛門

